

# 理念としての史的批判版

## ——ジークフリート・シャイベを中心に

森林駿介

はじめに

「史的批判版 (historisch-kritische Ausgabe)」<sup>1</sup>とは何か。ドイツ編集文献学において、その編集は、学術的編集が目指すべきひとつの理想像として長らく議論されてきた<sup>2</sup>。そして、いまなおこの名を冠した全集・著作集は出版され続けている<sup>3</sup>。だが、その実態はいささか複雑である。

一般には、フリードリヒ・バイスナー編集のヘルダーリン全集が、史的批判版のひな形のひとつとしてしばしば言及される。たとえば、それぞれ1970年代に刊行が開始された、ハインリヒ・ハイネ、アネッテ・フォン・ドロステ＝ヒュルスホフ、クレメンス・ブレンターノの史的批判版全集ないし著作集は、いずれもバイスナーの編集を模範としているとされている<sup>4</sup>。たしかにその意味ではバイスナーによるヘルダーリン全集の影響力は大きい。だが、ヘルダーリンの場合には、史的批判版と呼ばれる学術版全集は、他にも数種類存在し、史的批判版と一口にいても、その編集方針は全集によって様々である<sup>5</sup>。では、その違いはどのように考えればいいのか。

同様に、史的批判版として出版された他の作家の全集・著作集を比べてみても、その

---

本稿は、以下の口頭発表をもとにしている。森林駿介「史的批判版 (historisch-kritische Ausgabe) とは何か——ジークフリート・シャイベの理論を中心に」(日本独文学会2021年春季研究発表会)、オンライン、2021年6月6日;「理念としての史的批判版」(成城大学国際編集文献学研究センター主催 第一回ワークショップ「ドイツ編集文献学を学ぶその1」)、成城大学、2022年6月18日。

1 „Historisch-kritische Ausgabe“ の訳語については、これまで「歴史校訂版」「歴史批評版」など様々なものが用いられてきたが、議論の便宜上、本稿では一貫して „historisch“ を「史的」、„kritisch“ を「批判的」と訳し、版の名前も「史的批判版」と統一して表記することとする。

2 Vgl. z.B. Götsche, Dirk: *Ausgabentypen und Ausgabenbenutzer*. In: Rüdiger Nutt-Kofoth, Bodo Plachta u. a. (Hrsg.): *Text und Edition. Positionen und Perspektiven*. Berlin 2000, S. 37-63, bes. S. 43-53; Plachta, Bodo: *Editionswissenschaft. Eine Einführung in Methode und Praxis der Edition neuerer Texte*. Stuttgart 1997, S.11-26; Ders.: *Editionswissenschaft. Handbuch zu Geschichte, Methode und Praxis der neugermanistischen Edition*. Stuttgart 2020, S. 11ff.

3 たとえば2000年代以降に刊行が始まったものとして以下が挙げられる。Wieland, Christoph Martin: *Wielands Werke. Oßmannstedter Ausgabe. Historisch-kritische Ausgabe*. Hrsg. von Klaus Manger und Jan Philipp Reemtsma. Berlin/ New York 2008 ff.

4 Vgl. Götsche, *Ausgabentypen und Ausgabenbenutzer*, a.a.O., S. 46; Heine, Heinrich: *Historisch-kritische Gesamtausgabe der Werke*. Hrsg. von Manfred Windfuhr. Hamburg 1973-1997; Droste-Hülshoff, Anette von: *Historisch-kritische Ausgabe. Werke, Briefwechsel*. Hrsg. von Winfried Woesler. Tübingen 1978-2000; Brentano, Clemens: *Sämtliche Werke und Briefe. Historisch-kritische Ausgabe*. Hrsg. von Jürgen Behrens u.a. Stuttgart 1975ff.

5 それぞれの全集の特徴については、本号所収の各論考を参照されたい。

形態はそれぞれまったく異なっているように思われる。たとえば、「マールブルク版ビューヒナー全集」(Marburger Büchner-Ausgabe)のように、手書き原稿や出版稿だけでなく、作品執筆に用いられた文献の抜粋などの大量の資料を別冊として収録するという、計四分冊から成る大掛かりな構成をとっているものもあれば(第3巻『ダントンの死』)<sup>6</sup>、フランツ・カフカのように、手稿の写真とそれを活字に転写したものを収録した単なる写真版が、史的批判版の名のもとに刊行されている場合もある<sup>7</sup>。あるいは、なかには、「ブランデンブルク版クライスト著作集」(Brandenburger Kleist-Ausgabe)のように、史的批判版と銘打っていないにもかかわらず、研究者の間で史的批判版として認知されているものさえある<sup>8</sup>。

いったい史的批判版とは何なのか。そこに統一的な理念はあるのだろうか。そもそも、その名にある「史的批判的 (historisch-kritisch)」とは、何を意味しているのだろうか。本稿では、史的批判版をめぐる理論的な議論を、ジークフリート・シャイベ (1932-2017<sup>9</sup>) の論考を中心に整理する。シャイベは、1970年代から90年代にいたるまで、一貫して史的批判版に言及しその理論化を試みた、東ドイツの編集文献学 (Textologie) の第一人者である<sup>10</sup>。なかでも彼が1971年に発表した論文「史的批判版の基本原則」<sup>11</sup>は、史的批判版をめぐる議論において必ずといっていいほど取り上げられる基本文献のひとつとなっている。本論では、これを出発点としながら、その他の論考も取り上げ、シャイベにおいて史的批判版の理念がどのように構想され、そしてその位置づけが時代の変化とともにどのように移り変わっていったのかを明らかにしていく。

6 Büchner, Georg: Dantons Tod. In: Ders.: *Sämtliche Werke und Schriften. Historisch-kritische Ausgabe mit Quellendokumentation und Kommentar (Marburger Ausgabe)*. Bd. 3.1.-3.4. Hrsg. von Burghard Dedner und Thomas Michael Mayer. Darmstadt 2000.

7 Kafka, Franz: *Historisch-kritische Ausgabe sämtlicher Handschriften, Drucke und Typoskripte*. Hrsg. von Roland Reuß und Peter Staengle. Basel/ Frankfurt am Main 1995ff. 同様の例として、「史的批判版」と銘打っていないものの、E・T・A・ホフマン『砂男』の手稿をもとにした写真版が「史的批判的編集」と題して刊行されている。Hoffmann, E.T.A.: *Der Sandmann. Historisch-kritische Edition*. Hrsg. von Kaltërina Latifi. Frankfurt am Main/ Basel 2011.

8 Kleist, Heinrich von: *Sämtliche Werke. Brandenburger Kleist-Ausgabe. Kritische Edition sämtlicher Texte nach Wortlaut, Orthographie, Zeichensetzung aller erhaltenen Handschriften und Drucke*. Hrsg. von Roland Reuß und Peter Staengle. Basel/ Frankfurt am Main 1988ff. 同全集を史的批判版として言及しているものとして以下。Göttsche, *Ausgabetypen und Ausgabenbenutzer*, a.a.O., S. 46.

9 生没年は、ドイツ国立図書館の情報をもとにした。URL = <https://d-nb.info/gnd/134156420> (2023年9月22日閲覧)

10 東ドイツの編集文献学におけるシャイベの功績を紹介しているものとして以下。Korn, Uwe Maximilian: *Von der Textkritik zur Textologie. Geschichte der neugermanistischen Editionsphilologie bis 1970*. Heidelberg 2021, bes. S. 258ff. ただし、同書ではシャイベの論考の具体的な内容についてはほとんど触れられていない。

11 Scheibe, Siegfried: Zu einigen Grundprinzipien einer historisch-kritischen Ausgabe. In: Gunter Martens/ Hans Zeller (Hrsg.): *Texte und Variationen. Probleme ihrer Edition und Interpretation*. München 1971, S. 1-44.

## 1. ゲーテ編集から史的批判版の理論化へ

編集文献学者としてのシャイベの出発点は、いわゆる「アカデミー版ゲーテ著作集」(Goethe-Akademie-Ausgabe)<sup>12</sup>にある。作家生誕200周年にあたる1949年にベルリン科学アカデミー(のちのDDR科学アカデミー)のなかで企画が立ち上げられたこの新たな著作集は、当初、古典文献学者エルンスト・グルーマッハ主導のもとで編集が進められていた。彼は、作品テキストのほとんどを既存の著作集に依拠していた「ヴァイマル版ゲーテ著作集」(Weimarer Goethe-Ausgabe)の編集を批判し、ゲーテの原稿および刊本の詳細な調査に基づく新たな編集を目指した<sup>13</sup>。1952年にアカデミー版『西東詩集』が刊行され、その後も『若きウェルテルの悩み』(1954年刊行)などその他の作品の出版も——ただし作品テキストを取録した「本文篇」(Textband)のみの、注釈部を欠いた状態で——続けられたが、1959年にグルーマッハは編集の任を退くことになる。そして、彼からの強い推薦を受けてその後任についたのが、シャイベだった。

翌1960年、シャイベは、アカデミー版の編集作業に関する報告文を発表する<sup>14</sup>。そのなかで彼は、この著作集を史的批判版として位置づけ、その方針を次のように記している。「当該の作家が産んだ素材をすべて印刷して提供する」<sup>15</sup>。ゲーテの場合には、ひとつの作品をとってみても、作家が関与したテキストは複数存在する。手書き原稿、出版稿、あるいはのちに手を加えて出版した改訂版等々。さらに手稿や校正刷には、無数の修正や削除の跡が残されている。こうした作品に関わるあらゆる原稿および刊本、そしてそれらに確認される様々な異文、これらすべてをまとめて出版する。これをシャイベはゲーテ著作集の基本方針に据え、続く1961年には、その実現化に向け、自らが中心となってアカデミー版の編集綱領を新たにまとめている<sup>16</sup>。

もっとも、上で述べたようなテキストの状況は、ゲーテに限った話ではない。プラトンのように伝承された写本だけが残る古典テキストとは異なり、活版印刷術が普及して以降の作家の場合には、手稿から出版稿、改訂稿に至る複数の作品テキストが存在する

12 以下「アカデミー版ゲーテ著作集」の編集の経緯については、次の文献を参照した。Plachta, Bodo: Ernst Grumach und der ‚ganze Goethe‘. In: Roland S. Kamzelak/ Rüdiger Nutt-Kofoth/ Bodo Plachta (Hrsg.): *Neugermanistische Editoren im Wissenschaftskontext. Biografische, institutionelle, intellektuelle Rahmen in der Geschichte wissenschaftlicher Ausgaben neuerer deutschsprachiger Autoren*. Berlin/ Boston 2011, S. 219-242. また、ゲーテ編集一般については以下。Nutt-Kofoth, Rüdiger: Goethe-Editionen. In: Rüdiger Nutt-Kofoth/ Bodo Plachta (Hrsg.): *Editionen zu deutschsprachigen Autoren als Spiegel der Editions-geschichte*. Tübingen 2005, S. 95-116; 矢羽々崇「著作集編集と「古典」の成立—ゲーテ『若きウェルテルの悩み』」、明星聖子・納富信留編『テキストとは何か—編集文献学入門』、慶應義塾大学出版会、2015年、25-46頁。

13 ヴァイマル版の編集とその問題については、矢羽々、前掲論文、34-35頁参照。

14 Scheibe, Siegfried: Zu Problemen der historisch-kritischen Edition von Goethes Werken. Aus der praktischen Arbeit der Akademie-Ausgabe. In: *Weimarer Beiträge. Zeitschrift für deutsche Literaturgeschichte* 6, 1960, S. 1147-1160.

15 Ebd., S. 1147.

16 Vgl. Grundlagen der Goethe-Ausgabe. Ausgearbeitet von den Mitarbeitern der Goethe-Ausgabe [1961]. In: Siegfried Scheibe: *Kleine Schriften zur Editions-wissenschaft*. Berlin 1997, S. 245-272.

ことはもはや珍しくない<sup>17</sup>。したがって、後者に対しては、前者と異なる方法で編集することが新たな課題として求められる。

このような認識は、以下でみるシャイベの議論の重要な前提をなしている。1970年代以降の史的批判版の理論化の試みは、近代作家のテキスト一般に関わる編集の問題に対応するための、学術的編集の新たな基礎づけを意図したものだ。たとえば、先に触れた論文「史的批判版の基本原則」では、史的批判版の編集方法について、「古典文献学 (klassische Philologie)」との違いを次のように説明している。

それまでの文献学では、複数の写本を検討しながら、作家の意志に可能な限り近づくような正しい本文を「制作」することが目指された。すなわち、そこでの編集作業の核は、いわゆる「テキスト批判 (Textkritik)」にある。それに対して、近代作家の場合には、作家の意志が反映されたテキストはひとつに限定されず、しばしば複数の、それも同等に価値をもった「稿 (Fassungen)」として、われわれのもとに届けられる。ゆえに、古典文献学的な意味におけるテキスト批判は、もはや行う必要がない。その代わりに新たな編集が目指すべきは、様々な稿における作品テキストをすべて収録し、作品成立過程におけるそれらの関係を明らかにすることである<sup>18</sup>。

こうした近代作家のテキストを対象にした新たな学術的編集の理想モデルを、シャイベは「史的批判的編集 (historisch-kritische Editionen)」<sup>19</sup>の名のもとに論じている。では、そこでは実際に何が行われるのか。「史的批判的」という付加語は、具体的な編集の実践として何を指しているのだろうか。

## 2. 「史的」「批判的」とは何か

まず「史的」とは何か。シャイベの議論においてこの言葉は、文学テキストの歴史性に関わるものとして定義されているが、それは以下の二つの次元に分けて説明される<sup>20</sup>。

第一に、文学テキストそれ自体の生成プロセスとしての歴史性である。テキストは、ある時間の流れの中において形作られ、修正や書き直しなどを経てその都度発展していく。その過程は、作品がある時点で完成を迎え、出版されたとしても止まらない。先ほどのゲーテのように、完成されたはずのテキストに再び手を加えることも珍しくない。ゆえに、テキストは「静的なもの」ではなく、「ひとつの歴史のプロセス」そのものである<sup>21</sup>。そして、そのプロセスを示すのが、手稿や出版稿といった様々な段階の稿であり、それらに刻まれた修正などの跡である。

第二に、文学テキストの生成・発展の背景となる時代的コンテクストとしての歴史性である。テキストは、否が応でもそれが生まれた時代状況に依存し、規定されている。

<sup>17</sup> Vgl. 明星聖子「編集文献学とは何か」、明星聖子・納富信留編、前掲書、iii-xii頁；Plachta, *Editionswissenschaft*, a.a.O., S. 29f.

<sup>18</sup> Vgl. Scheibe, *Zu einigen Grundprinzipien einer historisch-kritischen Ausgabe*, a.a.O., S. 6f.

<sup>19</sup> Ebd., S. 2.

<sup>20</sup> Vgl. S. 3f.

<sup>21</sup> Ebd. S. 4.

逆に言えば、テキストはつねに、「特定の時代の表現ないし鏡」<sup>22</sup>として存在する。そのなかには、執筆時点での作家個人の伝記的な状況だけでなく、作家がおかれたより広い社会的・文化的状況も含まれる。このことは、上述の第一の点を考慮するとより複雑なものになる。というのも、同一作品であっても、時期が異なる稿のテキストは、それぞれ異なる作家の個人史ないし時代との対応関係をもちうるからだ。ゆえに、稿ごとにそれぞれの時代性を考慮しなければならない。

こうした二つの歴史性を踏まえたいうで、シャイベは、史的批判的編集が満たすべき「主要要件」<sup>23</sup>を次のようにまとめている。すなわち、その編集は、テキストの生成・発展の諸段階をすべて見通せるようなものでなければならない、かつ、そうした諸段階の位置づけを、作家の生涯そして時代そのものの中で照らして明らかにするものでなければならない<sup>24</sup>。

であれば、その編集作業は、必然的に次のような原則に従うことになる。すなわち、あらゆる稿は、その形態や時期にかかわらず、つまり手稿か出版稿か、初稿か最終稿かなどにかかわらず、すべて等価なものとして記録されなければならない。なぜなら、「それぞれ〔の稿〕は、同等の歴史的な正当性を備えており、それぞれが、ある歴史的な時点における作品と作家の姿を代表するものである」<sup>25</sup>からだ。ゆえに編集は、作家が書いたものであれば、その間に優劣をつけることなく、すべて同等の歴史的価値をもつものとして扱わなければならない。

では、もう一方の「批判的」は、この編集においてどのような意味を持つのだろうか。上述のように、シャイベは、史的批判的編集において古典文献学的なテキスト批判をそれほど重視していない。それでも彼は、ある面において、編集は「批判的」でなければならないと主張している。どういうことか。

シャイベの議論においては、この「批判的」であることもまた、テキストの歴史性に関わるものとして新たに定義されている。繰り返しになるが、近代作家の場合には、作家自身の手からなる複数の稿が存在し、さらにその内部においても複数の異文が存在する。シャイベによれば、それぞれのテキストは、本文か異文かにかかわらず、作品の生成において、特定の発展段階を代表する。ゆえに編集においては、それらの成立過程、個々の時期的な関係性などが「批判的」に精査される必要がある。そして、その作業を通じて、最終的に、作品の生成・発展全体の過程が描かれなければならない。シャイベの言葉を引用すれば、「編集の全体において、作品の歴史が、はっきりと見渡せるようにならないといけない」ということだ<sup>26</sup>。こうした「歴史のプロセスの可視化」を、シャイベは「高次のテキスト批判 (höhere Textkritik)」と名付けている<sup>27</sup>。つまり、「史的」と「批判的」は、それぞれ別個の概念として規定されているわけではない。シャイベに

22 Ebd.

23 Ebd., S. 6.

24 Ebd., S. 5f.

25 Ebd., S. 6.

26 Ebd., S. 7.

27 Ebd.



において「批判的」とは、あくまでもテキストの歴史性を明らかにする作業を指すものとして定義されているのだ。

以上の概念規定を踏まえたくうえで、シャイベは、「史的批判版の基本原則」を細かな項目に分けて記述しているが<sup>28</sup>、大まかにまとめれば、それはとりわけ以下の二点に集約される。第一に、作家由来のテキスト（作品、手紙、日記、論文、共著作品、メモ書き、翻訳など）をすべて刊行する。第二に、作品に関わるすべてのテキストを精査し、その歴史的な位置づけを明らかにする。つまり、作家のすべてを網羅し、すべての歴史をまとめる。シャイベの言葉を借りれば、史的批判版が最終的に目指すのは、すなわち、「作家の全作品の完全なドキュメンテーション」である<sup>29</sup>。

### 3. 肥大化する理想

ここでひとつの疑問が生じる。史的批判版によるドキュメンテーションは、いったいどこまでがその範囲に含まれるのか。上述のように、テキストの歴史性について述べる時、シャイベはテキスト生成の背景となる時代的なコンテクストにも言及していた。であれば、様々な事象がドキュメンテーションの対象になりうるのではないだろうか。ここで、1988年に彼が発表した論文を参照してみよう<sup>30</sup>。そのなかでシャイベは、1971年の論考よりも詳細に、そしてさらに拡張させて、史的批判版が扱うべきテキストの歴史について考察している。

同論文でのシャイベの議論は、学術的編集が果たすべき使命について記述することから始まる。彼によれば、学術的編集は、一種の「博物館 (Museum)」<sup>31</sup>でなければならない。博物館は、歴史資料を集積し、それらを整理し展示する。編集も同じように、作家に関するあらゆる歴史的素材を収集しながら、同時に、それらを体系的にまとめる「目録 (Katalog)」<sup>32</sup>を作成しなければならないという。シャイベはとりわけ後者の点を強調する。バラバラの資料を無秩序に提示するだけでは、読者に大きな負担を強いることになる。読者のためには、編集を通じて、全体を俯瞰するような視座を提供する必要がある。つまり、個々の素材を関係づけ、分析・評価し、それらを整理する作業が、学術的編集には求められるのだ。

その際、シャイベが重視するのは、以下の3つの観点である。すなわち、作品の成立、変遷、そして受容、である。これらを軸としながら、編集は、作品の様々な歴史を概観できるようにしなければならないという。

第一に、編集は作品の「成立の歴史 (Entstehungsgeschichte)」を明らかにしなければならない

<sup>28</sup> Vgl. ebd., S. 8-11.

<sup>29</sup> Ebd., S. 10f.

<sup>30</sup> Scheibe, Siegfried: Von der Entstehungsgeschichte, der Textgeschichte und der zeitgenössischen Wirkungsgeschichte. In: Siegfried Scheibe/ Waltraud Hagen/ Christel Laufer/ Uta Motschmann (Hrsg.): *Vom Umgang mit Editionen. Eine Einführung in Verfahrensweisen und Methoden der Textologie*. Berlin 1988, S. 160-204.

<sup>31</sup> Ebd., S. 162.

<sup>32</sup> Ebd.

ならない。そこでは、作品の執筆の動機や意図に関わる伝記的・社会的状況、執筆において参照された著作物、そして執筆前段階のメモ・スケッチなど、作品成立の様々な背景が整理されることになる<sup>33</sup>。

第二に、作品の「テキストの歴史 (Textgeschichte)」が正確に記述されなければならない。すなわち、作品テキストが執筆の過程において、加筆・修正・削除などを通してどのように変化していったのか、そしてそれが新聞・雑誌・書籍など様々な媒体においてどのように出版され流通したのか、その後どのように改訂されていったのか、が編集によって明らかにされなければならない<sup>34</sup>。ただし、このテキストの変遷史は、作品の成立史とも深く関わるため、必ずしも独立した項目として扱われるものではない、とシャイベは付け加えている<sup>35</sup>。

第三に、作品の「作用の歴史 (Wirkungsgeschichte)」が明らかにされなければならない。ここで扱われるのは、一言でいえば、作品が当時どのように受容され、そこでの読者の反応が作家の活動にどうフィードバックされたのか、である<sup>36</sup>。シャイベによれば、そこで対象となるのは、あくまでも作家が生きた時代に限定される。書評や劇評のような公的な媒体に掲載されたものだけでなく、手紙のような私的なやり取りも視野に入れながら、当時の受容の状況を整理し、さらには、それに対して作家自身がどのように反応したのかを明らかにすることが目指されるべきだという。

以上のように、成立・変遷・流通・受容といったひとつの作品をめぐる包括的な歴史を見通すようにすること、それらを「目録」のように概観できるようにすることが、シャイベの主張する学術的編集の使命である。さらに、彼はその最終的な理想を次のようにまとめている。学術的編集とは、「歴史的、政治的、イデオロギー的、社会的、芸術的、そして純粋に伝記的な関連事項を広範囲に組み込むことによって、芸術作品に対するしっかりとした見方を読者に可能にさせる」<sup>37</sup>ものである、と。このようにシャイベは、編集が対象とすべきテキストの歴史を限定するどころか、むしろその範囲を限りなく拡張している。

しかし、ひとつの全集ないし著作集において、作品の歴史を余すところなく記録するという彼の理想は、はたして現実的に可能なのだろうか。それは、シャイベ自身が述べていたようにひとつの「博物館」をつくることに等しく、膨大な時間と費用を要する大掛かりなプロジェクトにならざるをえない。実際に、こうした史的批判版の高すぎる理想については、当時からすでにそれを疑問視する声が上がっていた。たとえば、ウルリヒ・オットーは、1989年の『シラー年鑑』において、史的批判版の意義を問い直すべきだと訴え、論文の寄稿を呼びかけた<sup>38</sup>。「史的批判版が果たすべきドキュメンテーション

33 Vgl. ebd., S. 166-184.

34 Vgl. ebd., S. 184-193.

35 Ebd., S. 184.

36 Vgl. ebd., S. 193-204.

37 Ebd., S. 204.

38 Otto, Ulrich: Dichterwerkstatt oder Ehrengrab? Zum Problem der historisch-kritischen Ausgaben. Eine Diskussion. In: *Jahrbuch der deutschen Schillergesellschaft* 33, 1989, S. 3-6.

ンは完全性へと向かっている」とオットーは指摘する<sup>39</sup>。史的批判版はすべてを記録する、どれだけ時間と費用がかかろうとも。それに対してオットーは次のように問いかける。そんなものを読者は本当に必要としているのか、と<sup>40</sup>。

こうしたオットーの呼びかけを受け、翌1990年、シャイベを含む複数の論者——いずれも実際に学術的編集に携わっていた研究者——が、『シラー年鑑』に寄稿し応答を行った<sup>41</sup>。だが、集まったのは、呼びかけ人の期待に反して、史的批判版の意義を肯定的に論ずる論考ばかりだった。なかでもとりわけ目立つのは、やはりシャイベの論考である<sup>42</sup>。彼はそこで、史的批判版の過度の理想化を戒めるのではなく、むしろそのコンセプトをさらに肥大化させるかたちで応答したのである。

そこでとりわけシャイベが強調しているのは、学術的編集の目的は、研究の基盤となるものを提供することにある、という点だ。大前提として、その利用者はあくまでも研究者に限定される。たとえば自然科学の論文が一般の読者にとって高度に専門的で理解不可能であるように、学術的編集は、作品を楽しむ読者ではなく、相応の知識をもって作品を研究する専門家に向けてなされるべきものである<sup>43</sup>。その際、学術的編集は、研究の対象となるテキストを編集し提示することだけを目指すわけではない。それと同時に、その編集は、様々な素材の分析を通じて、テキストの歴史を解明し、専門家が必要とする様々な情報を提供しなければならない。シャイベの言葉を借りて言えば、「様々な目的をもって行われる学術的研究の基盤として、すべての素材を集めて分析・評価し、それらを科学的に解明する」<sup>44</sup>ことにこそ、学術的編集の意義がある。シャイベによれば、これを果たすことができるのは、史的批判版だけである。なぜなら、史的批判版だけが、すべての素材を集め、その分析を十全に行う可能性を有しているからだ<sup>45</sup>。

もっとも、このシャイベの説明は、ほとんど意味をなしていない。なぜならその主張は、一言でまとめてしまえば、学術的編集として史的批判版が完璧なのはそれが完璧な編集を行うからだ、という同語反復になっているからだ。シャイベは次のようにも言っている。「史的批判的編集は […] 様々な研究者によって提起されるあらゆる疑問に対して確かな答えができるように、可能な限り信頼性が高く、正確で、完全なものとして行わなければならない」<sup>46</sup>。あらゆる疑問に答える、研究の基盤としての史的批判版。それが、シャイベにとって学術的編集が目指すべき究極の姿である。だが、はたしてそんなものが可能なのだろうか。いったい誰がその編集を担うことができるのか。ここでのシャイベの理想はほとんど夢に等しく、実現不可能な空虚な理念だと言わざるをえない。

<sup>39</sup> Ebd., S. 4.

<sup>40</sup> Ebd., S. 5.

<sup>41</sup> Vgl. *Jahrbuch der deutschen Schillergesellschaft* 34, 1990, S. 398-428.

<sup>42</sup> Scheibe, Siegfried: Plädoyer für historisch-kritische Editionen. In: *Jahrbuch der deutschen Schillergesellschaft* 34, 1990, S. 406-415.

<sup>43</sup> Ebd., S. 407f.

<sup>44</sup> Ebd., S. 408.

<sup>45</sup> Ebd., S. 409.

<sup>46</sup> Ebd., S. 411.



## 4. 史的批判版から多様な編集へ

『シラー年鑑』での議論から数年後の1994年、文献学者グンター・マルテンスは、当時の傾向として、ゲルマニスティクにおける編集の実践が「ドキュメンテーション」に大きく向かっていると評した<sup>47</sup>。だが同時に、マルテンスは、近年の編集文献学の議論が利用者の問題に焦点を当てつつあること、すなわち、編集は誰に向けてなされるべきなのか、が問い直されつつあることを指摘している。学術的編集は「編集者のための編集」<sup>48</sup>になってはならず、それはつねに利用者を前提としなければならない。そして、利用者を志向することは、編集のあり方を問い直すことでもある。マルテンスによれば、「かつては史的批判版のみが編集理論の様々な取り組みの対象となっていた」が、今日では、「研究版・普及版 (Studien- und Leseausgaben) という領域」の重要性が学者の間でも徐々に認識されるようになったという<sup>49</sup>。

マルテンスの言うように、1990年代には史的批判版を絶対視するような議論は後退し、その代わりに、様々な利用者や目的に応じた編集の多様性が論じられるようになっていた<sup>50</sup>。たとえばクラウス・カンツォークは、1991年に刊行された編集文献学の入門書において、史的批判版から研究版、普及版までを含む「編集のスペクトラム (Spektrum der Editionen)」について論じている<sup>51</sup>。そこでは、史的批判版の学術的な重要性に言及がなされつつも、同時に、研究版と普及版の位置づけについて多くの議論が割かれている。カンツォークによれば、史的批判版はたしかに学術的編集の基礎となるものだが、その実現は困難である。ゆえに学術的編集は、「必ずしも史的批判版全集でなければならないというわけではない」<sup>52</sup>。

より決定的なのは、1992年に刊行されたハインリヒ・マイヤーの『学術的編集と版の類型論』である<sup>53</sup>。同書においてマイヤーは、あらゆる学術的編集の基礎としての史的批判版の理想を、編集文献学における「神話」と断罪している<sup>54</sup>。彼によれば、史的批判版は、学術的編集の唯一の形態として構想されたものだったが、実践的にはほとんど機能しなかった。現実にはむしろ、作家ないし作品に応じて様々なタイプの編集が

47 Martens, Gunter: Neuere Tendenzen in der germanistischen Edition. In: Hans Gerhard Senger (Hrsg.): *Philosophische Editionen. Erwartungen an sie – Wirkungen durch sie. Beiträge zur VI. Internationalen Fachtagung der Arbeitsgemeinschaft philosophischer Editionen, 11.-13. Juni 1992 Berlin* (= Beihefte zu editio 6). Tübingen 1994, S. 71-82, hier S. 80. 強調は原文による。

48 Vgl. ebd., S. 76.

49 Ebd., S. 76.

50 もっとも、ディルク・ゲッチェによれば、そうした議論はすでに1970年代から部分的に行われつつあったようだ。ただし、ここでは紙幅の関係上、マルテンスの議論をさらに広い歴史的な文脈で捉え直す可能性としてその存在を指摘するにとどめておく。Vgl. Götsche, *Ausgabentypen und Ausgabenbenutzer*, a.a.O., S. 37-38, Anm. 2.

51 Kanzog, Klaus: *Einführung in die Editionsphilologie der neueren deutschen Literatur*. Berlin 1991, S. 179-192.

52 Ebd., S. 187.

53 Meyer, Heinrich: *Edition und Ausgabentypologie. Eine Untersuchung der editionswissenschaftlichen Literatur des 20. Jahrhunderts*. Bern 1992.

54 Ebd., S. 170.

それぞれ実践されてきたという。同書の結論ではマイヤーもまた、「連続的なスペクトラム (ein kontinuierliches Spektrum)」<sup>55</sup>という言葉によって、そうした編集の多様性を強調している。

このように、1990年代に入ると、史的批判版への風当たりは一層強くなる。一見すると、この時点でシャイベの議論はほとんど無効になってしまった感がある。だが、興味深いことに、編集の「スペクトラム」に関するマイヤーの議論は、じつはシャイベが重要な参照項になっている。というよりも、むしろシャイベは、この「スペクトラム」を理論的に根拠づけた人物のうちの一者として位置づけられているのだ<sup>56</sup>。どういうことか。

すでに確認したように、1971年の論考「史的批判版の基本原則」において、シャイベは、史的批判版を学術的編集の理想として位置づけ、その理論化を試みた。だが、彼は、必ずしも史的批判版だけがあればいいと語っていたわけではない。シャイベによれば、そもそもこの巨大な編集プロジェクトの対象になりうる作家は限られている。そして、仮にある作家が対象に選ばれたとしても、作家に応じて「目的に適った編集形式」<sup>57</sup>が吟味されなければならないという。たとえば、全著作に対して史的批判版が編集される場合もあれば、主要著作のみ、あるいは一部のジャンルのみだけがその対象となる場合もある。要は、史的批判的編集が限定的に施されても構わないとシャイベは言っているのだ。その場合、ひとつの全集ないし著作集であっても、史的批判版とそうではない版とが混在することになる。シャイベによれば、「これまでたいのみの史的批判版は、ひとつの基本モデルに固執してきた。だが将来的には、ひとつの版の内部であっても、様々な編集方法を認めるようにならなければならない」<sup>58</sup>。

だが、史的批判版ではない版とは何なのだろうか。そこでの編集はどうあるべきなのだろうか。マイヤーによれば、1980年代になるとシャイベは、史的批判版の様々なバリエーションを論じるなかで、繰り返し研究版に言及するようになる<sup>59</sup>。決定的なのは、1987年に編集文献学のジャーナル『エディツィオ』第一号に掲載された論考「ドイツ文学の将来的な編集作業の重点」である<sup>60</sup>。このなかでシャイベは、一方では、これまでみてきた論考と同じ調子で、史的批判版の学術的な意義について高らかに論じている。だがその一方で、史的批判版の編集が難しい作家に対しては、研究版を編集することを提案している<sup>61</sup>。つまり、ここで研究版は、史的批判版の穴を埋める学術的編集の一形態として位置づけられているのだ。

もちろん、シャイベは史的批判版と研究版の差異を再三強調する。前者が一部の専門

55 Ebd., S. 179.

56 Vgl. ebd., S. 172.

57 Scheibe, Zu einigen Grundprinzipien einer historisch-kritischen Ausgabe, a.a.O., S. 12.

58 Ebd., S. 15.

59 Vgl. Meyer, *Edition und Ausgabentypologie*, a.a.O., S. 153ff.

60 Scheibe, Siegfried: Schwerpunkte künftiger germanistischer Editionsarbeit. Gesehen aus der Perspektive eines Textologen der DDR. In: *editio. Internationales Jahrbuch für Editionswissenschaft* 1, 1987, S. 1-14.

61 Ebd., S. 11f.

家に向けたものであるのに対し、後者は「より広い利用者層」<sup>62</sup>に向けたものである、と。だが、すでに触れたように、シャイベは、史的批判版が現実には限定的にしか実現されえないことを認めている。であれば、彼の主張にしたがえば、学術的編集のほとんどは、実質的には研究版でしかありえないということになるだろう。マイヤーが指摘するように、シャイベの議論では、じつは「研究版が版の類型論のひそかな中心地になっている」のである<sup>63</sup>。

では、研究版はどのようなものであるべきなのか。マイヤーの議論では言及されていないが、研究版については、1971年の「史的批判版の基本原則」でもすでに触れられている。そこでの研究版の位置づけは次のようなものである。第一に、研究版は、史的批判版の作業を前提とする。すなわち、研究版は、「史的批判版からその素材をできる限り引き継ぐべきである」<sup>64</sup>。だが、第二に、研究版はすべての素材を収録するのではなく、自らの観点からその取捨選択を行う。研究版はあくまでも「ある特定の一般的な目的」<sup>65</sup>に役立つものでなければならないからだ。このように研究版は、一方では史的批判版と同じようにある程度の学術性を担保しなければならない、しかし他方では普及版と同じように一般に向けたものでなければならない、とされている。

では、その「ある特定の一般的な目的」とは何か。それについてシャイベは明示的に語ってはいない。というのも、その目的は、対象となる作家や作品に応じて様々な可能性がありうるからだ。だが、それは、シャイベ自身も認めるように、結果として「原理的には複数のタイプの版が相対峙することになる」<sup>66</sup>事態を意味している。

この議論は、そのまま1987年の論考にも引き継がれている。その結論部においてシャイベは、学術的編集のあるべき姿を次のように描いている。

目指すべきは、将来の科学者が、自分の蔵書の中でたまたま目に入ったひとつの版を無作為に手に取るのではなく、自分の要求とニーズを最も満たし、最も正確な情報を提供してくれる版を目的に合わせて選ぶようになることである。そうなれば、さまざまな種類の版が、本来の役割を果たすことになる。それらはもはや競争することはなく、それぞれ異なる学問的、社会的、文化政治的関心を満たすものとなるだろう。<sup>67</sup>

ここで語られる未来像に史的批判版の姿はない。その代わりに学術的編集のあるべき姿として強調されているのは、多種多様な学術版が存在し、そしてそれを学者が目的に応じて自由に使うという編集の多様性である。この身振りは、これまでみてきたような、史的批判版という理想像を中心に据えるシャイベの編集理論の方向性からは大きく逸脱

62 Ebd., S. 13.

63 Meyer, *Edition und Ausgabentypologie*, a.a.O., S. 156.

64 Scheibe, *Zu einigen Grundprinzipien einer historisch-kritischen Ausgabe*, a.a.O., S. 11.

65 Ebd., S. 11.

66 Ebd.

67 Scheibe, *Schwerpunkte künftiger germanistischer Editionsarbeit*, a.a.O., S. 14.

している。むろんこれもまた、ひとつの理想に過ぎないだろう。だが、少なくともこの論考では、シャイベは多様な編集という理想を編集文献学の今後の重要な課題として位置づけている。「この課題は将来に残されたものであり、おそらく以前にも増して重要なものとなるだろう」<sup>68</sup>。

おわりに

本稿は、史的批判版とは何かという問いから出発した。シャイベの理論にしたがえば、それは、作家の作品テキストの歴史をすべて記録する学術的編集の極北として位置づけられる。だが、その高すぎる理想は、実践的にはほとんど実現不可能な代物と言わざるをえない。ゆえに、シャイベ自身も、一種の妥協とはいえ、それに代わる学術的編集として研究版に言及せざるをえなかった。もっとも、それは、実践的には目的に応じた様々なかたちがありえ、理論的にはゆるやかにしか定義されえない。学術的編集をめぐるシャイベの思索は、このように理論と実践のあいだで揺れ動いている。

では、シャイベの議論は今日からみてどのような意味をもつだろうか。ここで考えるべきは、シャイベの時代と現代とでは、編集をめぐる技術的状況が大きく異なるという点だろう。近年のデジタルメディアの発展は、学術的編集の営みにも多大な影響を与え、いまでは特定の作家・作品を対象にしたデジタル・アーカイブの試みは珍しくないものになりつつある<sup>69</sup>。資料をデータ化し、ひとつのサイトないしCD・DVD-ROMに集約する。理論的には、デジタル技術を駆使すれば、あらゆるものがドキュメンテーション可能となるだろう。これは、シャイベの史的批判版の理想が、技術的に実装されつつあることを意味しているようにもみえる<sup>70</sup>。

この認識は、おそらく半分は正しい。シャイベがいう史的批判版とは、すべてをドキュメンテーションするものなのだから。だが、その一方で注意しなければならない。シャイベが学術的編集を論じるとき、そこにはつねに次のような前提がある。すなわち、

<sup>68</sup> Ebd.

<sup>69</sup> たとえば2009年には「クラゲンフルト版ムージル全集」がDVD-ROMのかたちで刊行されている。同全集には、計一万頁以上の手稿の画像とそれを活字化したもの、校訂文、解説などがデジタルデータとして収録されており、史的批判版という名はつけられていないものの、編者の一人はその試みを「DVD上の史的批判的編集 (eine historisch-kritische Edition auf DVD)」として紹介している。Vgl. Musil, Robert: *Klagenfurter Ausgabe. Kommentierte Edition sämtlicher Werke, Briefe und nachgelassener Schriften, mit Transkriptionen und Faksimiles aller Handschriften*. Hrsg. von Walter Fanta, Klaus Amann und Karl Corino. (DVD-Edition) Klagenfurt 2009; Fanta, Walter: Robert Musil – Klagenfurter Ausgabe. Eine historisch-kritische Edition auf DVD. In: *editio. Internationales Jahrbuch für Editionswissenschaft* 24, 2010, S. 118-148.

<sup>70</sup> たとえばリュディガー・ヌト＝コフォトは、デジタルメディアを活用した新たな学術版として「デジタル史的批判版 (die Digitale Historisch-kritische Ausgabe)」について論じている。シャイベの名こそないが、同論文で示されている「デジタル史的批判版」の内容(「全手稿の完全な活字化」、「テキスト生成の完全な提示」、「成立と受容に関する全資料の提示」等)は、ほとんどシャイベの理論を反復したものになっている。Vgl. Nutt-Kofoth, Rüdiger: *Historisch-kritische Ausgabe digital. Eine Reformulierung der neugermanistischen Edition*. In: Fotis Jannidis (Hrsg.): *Digitale Literaturwissenschaft. DFG-Symposium 2017*. Berlin 2022, S. 419-450, bes. S. 440.

編集が目指すのは単なるアーカイブではない、ということである。たしかに彼は史的批判版を博物館に喩えていた。しかし、そこでの彼の力点は、素材をただ集めることではなく、それを分析し整理することにある。じつはシャイベは、自身の論考のなかで、学術的編集はつねに利用者のことを考えなければならないと再三強調している。つまり、資料をあるがままの状態で収録するのではなく、利用者が活用できるよう、それに手を加えて提示しなければならないというのだ。シャイベ自身の言葉を借りれば、学術的編集の成果は「可能な限り単純で機能的な方法によって」<sup>71</sup> 利用者に示されなければならない。ゆえに、1971年の論考では、手稿の単なるファクシミリ化についてやや距離をもって言及している（「写真によるコピー、つまりファクシミリは、学術的編集の必要性にとっては限定的な価値しか持たない」<sup>72</sup>）。

もっとも、その「方法」についてシャイベが十分な議論を行っていないのも事実である。それでも、彼の問題意識そのものは、現代のわれわれにとってきわめてアクチュアルだと言える。ディルク・ゲッチェが指摘するように、すべてを記録するデジタル・アーカイブの可能性に大きな期待が寄せられているいま、むしろ、記録される資料をどのように編集し利用者のもとへ提供するかという問題の重要性が今後高まっていくだろう<sup>73</sup>。アーカイブと編集、両者のバランスをどう考えるか——シャイベの議論は、今なお考えるべき問題をわれわれに残している。

#### 参考文献

- Brentano, Clemens: *Sämtliche Werke und Briefe. Historisch-kritische Ausgabe*. Hrsg. von Jürgen Behrens u.a. Stuttgart 1975ff.
- Büchner, Georg: Dantons Tod. In: Ders.: *Sämtliche Werke und Schriften. Historisch-kritische Ausgabe mit Quellendokumentation und Kommentar (Marburger Ausgabe)*. Bd. 3.1.-3.4. Hrsg. von Burghard Dedner und Thomas Michael Mayer. Darmstadt 2000.
- Droste-Hülshoff, Anette von: *Historisch-kritische Ausgabe. Werke, Briefwechsel*. Hrsg. von Winfried Woesler. Tübingen 1978-2000.
- Fanta, Walter: Robert Musil – Klagenfurter Ausgabe. Eine historisch-kritische Edition auf DVD. In: *editio. Internationales Jahrbuch für Editionswissenschaft* 24, 2010, S. 118-148.
- Götttsche, Dirk: Ausgabentypen und Ausgabenbenutzer. In: Rüdiger Nutt-Kofoth, Bodo Plachta u. a. (Hrsg.): *Text und Edition. Positionen und Perspektiven*. Berlin 2000, S. 37-63.
- Grundlagen der Goethe-Ausgabe. Ausgearbeitet von den Mitarbeitern der Goethe-Ausgabe [1961]. In: Siegfried Scheibe: *Kleine Schriften zur Editionswissenschaft*. Berlin 1997, S. 245-

<sup>71</sup> Scheibe, Zu einigen Grundprinzipien einer historisch-kritischen Ausgabe, a.a.O., S. 13.

<sup>72</sup> Ebd., S. 14.

<sup>73</sup> Vgl. Götttsche, Ausgabentypen und Ausgabenbenutzer, a.a.O., S. 61ff.



- 272.
- Heine, Heinrich: *Historisch-kritische Gesamtausgabe der Werke*. Hrsg. von Manfred Windfuhr. Hamburg 1973-1997.
- Hoffmann, E.T.A.: *Der Sandmann. Historisch-kritische Edition*. Hrsg. von Kaltërina Latifi. Frankfurt am Main/ Basel 2011.
- Kafka, Franz: *Historisch-kritische Ausgabe sämtlicher Handschriften, Drucke und Typoskripte*. Hrsg. von Roland Reuß und Peter Staengle. Basel/ Frankfurt am Main 1995ff.
- Kanzog, Klaus: *Einführung in die Editionsphilologie der neueren deutschen Literatur*. Berlin 1991.
- Kleist, Heinrich von: *Sämtliche Werke. Brandenburger Kleist-Ausgabe. Kritische Edition sämtlicher Texte nach Wortlaut, Orthographie, Zeichensetzung aller erhaltenen Handschriften und Drucke*. Hrsg. von Roland Reuß und Peter Staengle. Basel/ Frankfurt am Main 1988ff.
- Korn, Uwe Maximilian: *Von der Textkritik zur Textologie. Geschichte der neugermanistischen Editionsphilologie bis 1970*. Heidelberg 2021.
- Martens, Gunter: Neuere Tendenzen in der germanistischen Edition. In: Hans Gerhard Senger (Hrsg.): *Philosophische Editionen. Erwartungen an sie – Wirkungen durch sie. Beiträge zur VI. Internationalen Fachtagung der Arbeitsgemeinschaft philosophischer Editionen, 11.-13. Juni 1992 Berlin* (= Beihefte zu editio 6). Tübingen 1994, S. 71-82.
- Meyer, Heinrich: *Edition und Ausgabentypologie. Eine Untersuchung der editionswissenschaftlichen Literatur des 20. Jahrhunderts*. Bern 1992.
- Musil, Robert: *Klagenfurter Ausgabe. Kommentierte Edition sämtlicher Werke, Briefe und nachgelassener Schriften, mit Transkriptionen und Faksimiles aller Handschriften*. Hrsg. von Walter Fanta, Klaus Amann und Karl Corino. (DVD-Edition) Klagenfurt 2009.
- 明星聖子・納富信留編『テキストとは何か—編集文献学入門』、慶應義塾大学出版会、2015年。
- Nutt-Kofoth, Rüdiger: Goethe-Editionen. In: Rüdiger Nutt-Kofoth/ Bodo Plachta (Hrsg.): *Editionen zu deutschsprachigen Autoren als Spiegel der Editionsgeschichte*. Tübingen 2005, S. 95-116.
- Nutt-Kofoth, Rüdiger: Historisch-kritische Ausgabe digital. Eine Reformulierung der neugermanistischen Edition. In: Fotis Jannidis (Hrsg.): *Digitale Literaturwissenschaft. DFG-Symposium 2017*. Berlin 2022, S. 419-450.
- Otto, Ulrich: Dichterwerkstatt oder Ehrengrab? Zum Problem der historisch-kritischen Ausgaben. Eine Diskussion. In: *Jahrbuch der deutschen Schillergesellschaft* 33, 1989, S. 3-6.
- Plachta, Bodo: *Editionswissenschaft. Eine Einführung in Methode und Praxis der Edition neuerer Texte*. Stuttgart 1997.
- Plachta, Bodo: Ernst Grumach und der ‚ganze Goethe‘. In: Roland S. Kamzelak/ Rüdiger Nutt-Kofoth/ Bodo Plachta (Hrsg.): *Neugermanistische Editoren im Wissenschaftskontext. Biografische, institutionelle, intellektuelle Rahmen in der Geschichte wissenschaftlicher Ausgaben neuerer deutschsprachiger Autoren*. Berlin/ Boston 2011, S. 219-242.
- Plachta, Bodo: *Editionswissenschaft. Handbuch zu Geschichte, Methode und Praxis der*

- neugermanistischen Edition*. Stuttgart 2020.
- Scheibe, Siegfried: Zu Problemen der historisch-kritischen Edition von Goethes Werken. Aus der praktischen Arbeit der Akademie-Ausgabe. In: *Weimarer Beiträge. Zeitschrift für deutsche Literaturgeschichte* 6. 1960, S. 1147-1160.
- Scheibe, Siegfried: Zu einigen Grundprinzipien einer historisch-kritischen Ausgabe. In: Gunter Martens/ Hans Zeller (Hrsg.): *Texte und Variationen. Probleme ihrer Edition und Interpretation*. München 1971, S. 1-44.
- Scheibe, Siegfried: Schwerpunkte künftiger germanistischer Editionsarbeit. Gesehen aus der Perspektive eines Textologen der DDR. In: *editio. Internationales Jahrbuch für Editionswissenschaft* 1, 1987, S. 1-14.
- Scheibe, Siegfried: Von der Entstehungsgeschichte, der Textgeschichte und der zeitgenössischen Wirkungsgeschichte. In: Siegfried Scheibe/ Waltraud Hagen/ Christel Laufer/ Uta Motschmann (Hrsg.): *Vom Umgang mit Editionen. Eine Einführung in Verfahrensweisen und Methoden der Textologie*. Berlin 1988, S. 160-204.
- Scheibe, Siegfried: Plädoyer für historisch-kritische Editionen. In: *Jahrbuch der deutschen Schillergesellschaft* 34, 1990, S. 406-415.
- Wieland, Christoph Martin: *Wielands Werke. Oßmannstedter Ausgabe. Historisch-kritische Ausgabe*. Hrsg. von Klaus Manger und Jan Philipp Reemtsma. Berlin/ New York 2008 ff.

## The Concept of the Historical-Critical Edition: Siegfried Scheibe's Editorial Theory

Shunsuke MORIBAYASHI

The German concept of the “historical-critical edition” (“historisch-kritische Ausgabe“) has long been the subject of theoretical debate in German Textual Scholarship (Editionsphilologie / Editions-wissenschaft). This label is also being used for the currently published editions of various authors. However, the definition of the label remains unclear. What is the historical-critical edition? What does it aim to achieve and how? With these questions in mind, this study examines the theoretical discussions regarding this edition, primarily through the writings of East German philologist Siegfried Scheibe, who, since the 1970s, has consistently attempted to theorize the historical-critical edition as the ideal model of scholarly editing. Further, this study analyzes how the historical-critical edition has been defined as a complete documentation of the author's works, how it has been idealized as a basis for literary studies, and how its position in German Textual Scholarship in relation to other types of editions has changed.